

## 本木昌造と印刷博物館

国際印刷大学校長・九州産業大学名誉教授

工学博士 木下 堯博

本木昌造は日本の近代印刷文化の創始者として活躍し、明治8年(1875年)9月3日に没した。彼の功績は今日の情報化社会の基礎を築き上げたことである。

本木昌造顕彰会(長崎市出島)は毎年、故人をしのび法要をとり行っている。本年は2006年9月1日に131回忌が墓所である大光寺(長崎市鍛冶屋町)で盛大に催された。大きな節目としては1995年9月2日の120回忌、2005年9月3日の130回忌がある。

120回忌では長崎市の東亜閣で記念座談会が開催され、本木昌造を中心とした博物館建設運動が協議された。1995年8月26日の長崎新聞に本木昌造120回忌を記念して世界の動向に歩調を合わせて「印刷博物館建設を」のタイトルで文化欄に投稿した。

2003年5月23日、長崎県印刷工業組合の総会の際、佐世保シティホテルで「世界の印刷博物館に関する調査研究(第2報)」を報告した。

これは著者が drupa、IPEX、Print などの国際印刷展がある折に、各地の「印刷及び新聞博物館」を訪れ、ユネスコの会議や印刷国際会議のある時に、時間を調整しながら足で歩きまとめたものである。

長崎印刷組合史(1998年10月刊)には「世界の印刷博物館に関する調査研究(第1報)」が掲載されている。印刷博物館は世界で107館以上存在し、うち72館はヨーロッパにあり、ドイツでは「ゲーテンベルグ博物館」を中心として15館設置されていて、多くの研究業績が積み上げられている。アジアでは10館程度で印刷の発祥の地域としては寂しいものがある。

130回忌では長崎県印刷工業組合50周年記念式典と記念懇親会が「花月」で行われ、2003年10月に内田信康理事長のもとで「日本の近代活字・本木昌造とその周辺」と題した書籍(450ページ)を上梓されたことに対しその労苦を称えた。

また、長崎印刷会館(長崎市出島)の3階には活字と組版などの設備を導入し、小中学生に開放し、印刷文化の偉大さを後世に伝える活動をしている。

活字、文字分野はDTPとして発展を続けているが、IPEX2006が4月4日から開幕されたが、その前日、Adobe社からAdobe PDF Print Engine(APPE)が発表された。

プリプレスベンダー各社(Fujifilm、Heidelberg、Screen、Kodak、Agfa、Xerox、Oce、EFI、Morisawaなど11社)が次世代印刷プラットフォームとして開発中であり、2007年の初頭にも従来のポストスクリプトからAPPEへの移行が始まると思われる。この分野は新しいCMSとの対応をふまえ後日報告する。

IPEX2006の期間中、イギリスの中部にある、ノービッチのジョン・ヘラルド印刷博物館を見学した。この博物館は実際の印刷機械などを運転していて、実作業を行いながら博物館の役目を果たしている。この方式は drupa2000 の時、訪問したライブチッヒ印刷博物館と類似している。続いて訪問したケンブリッジ大学は43年ぶりであったが、かつての静かな街が車の騒音でごった返していた。大学の建物は変わらず中央図書館は各カレッジの中心的存在である。ここでは先に述べた「グーテンベルグ博物館」とマインツ大学の出版研究所との共同編集である「Gutenberg Jahr Buch」年鑑の第1巻から本年刊行の第80巻まで開架式で保存されていて、その Index から印刷の発明と印刷博物館の関連を調査した。同大学は日本語学科が設置されていて、書誌学担当の日本人教授が教鞭をとっていた。また、ロンドン市内にあるセントブライド博物館兼図書館はイギリスで印刷技術を広めたウィリアム・カクストンの研究が盛んである。同館は IPEX2002 の時よりも新装改築され、充実している印象を受けた。

2006年7月30日、ソウル近郊にある(株)斗山印刷での Meeting の帰路、清州古印刷博物館を訪問した。2000年の drupa 後の国際会議と「直指」のユネスコ Memory of World 受賞以来6年ぶりであったが、学芸員の Min Kyoung-chul 氏に丁寧な説明をして頂いた。ユネスコの受賞以来、館内展示方式が充実し、研究者からの寄贈などにより、内容が豊富になっていた。韓国の「直指心体要節」は1377年に活字による刊行というのが一般的となり、Gutenberg の1447年よりも70年前に出版が行われたことを長年の研究と復元により実証してきた。毎年、「直指祭1377」が開催され、世界各地からこの博物館に集まり研究と国民に対する PR 活動は清州市の年中行事ともなっている。(写真参照) (株)斗山印刷の安山工場の1階にある博物館もこの清州古印刷博物館の指導をうけている。

このように各国での印刷博物館は印刷の発明・発見をした人物や歴史的価値のある印刷物を対象として研究を積み上げている。 **グーテンベルグ(1447年)** **グーテンベルグ博物館**、 **カクストン(1476年)** **セントブライド博物館兼図書館**、 **ピージェン(1041年)** **北京、中国印刷博物館**、 **直指心体要節(1377年)** **清州古印刷博物館**などで周辺の大学との協力もあり、国家的財産としての価値を生み出している。

これに対し日本の印刷の創始者 **「本木昌造」(1870年)** を中心とした博物館建設運動は古くからあり、実現に至っていない。

本木昌造を中心とした博物館の構想は近代印刷を導いた成果と今後の印刷文化に対する出版・印刷メディアの研究・教育機関が長崎市にも必要とされるであろう。

国際印刷大学校はカリキュラムに「印刷博物館学」を開学当時の2000年から開講していて、博物館建設にも協力することを惜しみません。長崎県印刷工業組合、本木昌造顕彰会のますますの発展を祈念します。

(2006年9月2日記)



写真 清州古印刷博物館正面玄関にて（2006年7月30日訪問）  
左から Min 学芸員、筆者、(株)小森コーポレーション金東君、(株)斗山印刷李部長